

〔報告〕

看護学生の点滴静脈内注射に関する危険予測内容の分析

南 妙子, 岩本真紀, 栗納由記子, 名越民江

香川大学医学部看護学科

Analysis of the Contents of Risk Prediction Related to
Intravenous Drip Infusion by Nursing Students

Taeko Minami, Maki Iwamoto, Yukiko Awanou, Tamie Nagoshi

School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University

要 旨

看護学生の点滴静脈内注射に関する危険予測の傾向を分析し、教育内容ならびに安全教育の基礎資料を得ることを目的に、2006年度から2008年度にA大学2年次学生から提出された点滴静脈内注射実施中の紙上事例患者に起こりえる危険性に関するグループレポート内容を分析した。1グループの学生人数は3~4人で、全46グループ中、研究の趣旨にグループ全員の同意の得られた42グループのレポート内容を分析対象とした。

学生が予測した危険内容は、23項目(延べ個数153)であった。これらの内容は、血管外漏出や薬物過敏反応などの【静脈内注射に伴う合併症】が8項目(延べ個数71)、滴下数の変化や点滴ルートの屈曲などの【点滴中の観察・管理に起因する危険性】が7項目(延べ個数50)、移動動作時のルート抜去や転倒の危険性などの【点滴中の日常生活行動に伴う危険性】の8項目(延べ個数32)の3つの内容に大きく分類できた。それぞれの項目の危険内容全体に対する延べ個数の割合は、46.4%、32.7%、20.9%であった。

以上の結果より、学生は、【点滴中の観察・管理に起因する危険性】や【点滴中の日常生活行動に伴う危険性】に比べ、文献等から得られる【静脈内注射に伴う合併症】の項目を危険性として予測する傾向にあり、点滴の管理や患者の日常生活行動に着目して危険を予測することが困難であることが考えられた。点滴中の患者の観察・管理やケア方法についての理解を促す教育方法の検討が必要である。

キーワード：看護学生、危険予測、点滴静脈内注射、教育方法、安全教育

Summary

To analyze the tendencies for risk prediction related to intravenous drip infusion by nursing students and gather basic data for educational contents and safety education, sophomores at a university from 2006 to 2008 were presented with nursing scenarios requiring intravenous drip infusion and were asked to anticipate risks. A total of 46 groups(3-4 students each) were used, and the contents of reports prepared by 42 consenting groups were analyzed.

Students predicted 23 risks(total, 153 items). Eight risks(71 items) related to "complications accompanying intravenous injection", such as extravasation and drug sensitivity reaction; 7 risks(50 items) related to "risks originating from observation and management during drip infusion", such as changes in the number of drip infusions and kink in the drip infusion line; 8 risks(32 items) related to "risks accompanying activities of daily living during drip infusion", such as decannulation while moving and risks of falling. In this manner, risk contents

連絡先：〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1 香川大学医学部看護学科 南 妙子

Reprint requests to: Taeko Minami, School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University, 1750-1 Ikenobe, Miki-cho, Kita-gun, Kagawa 761-0793, Japan

were roughly divided into the 3 above-mentioned categories. The ratio of each category to overall risk contents was 46.4%, 32.7% and 20.9%, respectively.

These results indicate that students are more likely to predict risks related to "complications for intravenous injection" that can be ascertained from the literature, when compared to "risks originating from observation and management during drip infusion" and "risks accompanying activities of daily living during drip infusion", and predicting risks while focusing on drip infusion management and patient activities of daily living is difficult. Investigation of education methods to aid students in understanding patient observation, management and care during drip infusion is thus necessary.

Keywords: Nursing student, Risk prediction, Intravenous drip infusion, Education method, Safety education

はじめに

看護師による静脈内注射の実施は、平成14年の厚生労働省事務局長通知により法的解釈が変更され、看護基礎教育課程においては、静脈内注射に関する教育内容についての検討が必要となってきた。また、平成14年版看護白書¹⁾における看護職者の関与が報道された医療事故のうち、「注射、点滴、IVH（中心静脈内注射）など」の静脈内注射の項目は、26.8%を占め、最も上位の項目であるとともに、新人看護師の技術習得状況調査²⁾における静脈内注射は、技術習得率の低い項目のひとつとして報告されている。

このように、医療事故に占める割合が高く、技術習得上の困難性も高い静脈内注射に関して、筆者らは、確実な技術習得だけでなく、点滴静脈内注射の危険性を医療安全の側面からの理解を促すことの必要性を感じてきた。しかし、限られた授業時間内に新たな内容を加えるには、教授方法の工夫や教授内容の精選が必要であり、点滴静脈内注射における医療安全に関する教授内容についても検討が必要と考えられた。

安全教育の側面からは、新人看護師のヒヤリハット報告件数の割合が高い原因のひとつとして、危険を察知する能力（リスク感性）が身につけていないことが報告され³⁾、看護基礎教育においても、学生の危険予知能力育成のために、KYT（危険予知トレーニング）を取り入れた研究⁴⁾⁵⁾が報告されるようになってきている。学生の危険予測に関する先行研究では、布施⁶⁾の転倒に対するヒヤリハット体験と危険予測についての報告があるが、点滴静脈内注射に関するものは、卒業後の看護師の静脈内注射の技術獲得過程⁷⁾⁸⁾や入職後3ヶ月や6ヶ月後の技術習得状況⁹⁾¹⁰⁾を明らかにしたものはあるが、危険予測についての報告は見あたらなかった。

そこで、筆者らは、看護学生の点滴静脈内注射実施中の患者に起こりえる危険性に関する予測内容から、学生の危険予測の傾向を分析し、点滴静脈内注射に関する教

育内容を検討するとともに安全教育の基礎資料を得たいと考えた。

目的

本研究の目的は、看護学生の点滴静脈内注射実施中の患者に起こりえる危険性に関する予測内容から、学生の危険予測の傾向を分析し、点滴静脈内注射に関する教育内容ならびに安全教育の基礎資料を得ることである。

方法

1. 対象

対象は、2006年度～2008年度にA大学看護学科2年次に在籍し、基礎看護援助論Ⅲの科目において、点滴静脈内注射の学内演習を実施した学生である。3～4人を1グループとして学内演習を実施し、演習において設定した紙上事例患者に起こりえる危険性に関するグループレポートの提出を求めた。グループの総数は46グループで、2006年度と2007年度は各15グループ、2008年度16グループであった。

2. 点滴静脈内注射に関する学生の学習レディネス

基礎看護学領域での点滴静脈内注射に関する講義・演習は基礎看護援助論Ⅲの中で行っている。講義では、点滴静脈内注射を安全に実施するための基礎知識として、静脈内注射の種類・目的と使用物品、安全な血管選択のための基礎知識、ワンショット静脈内注射と末梢静脈内点滴実施時の原則・留意点と実施方法、静脈内注射時の合併症ならびに点滴静脈内注射実施中の患者の観察項目と日常生活援助に関する内容を説明している。A大学のカリキュラムでは、中心静脈内注射や輸液・シリンジポンプの扱い方については、成人看護学や小児看護学などの専門看護学領域において教授されている。

対象学生の学習レディネスは、基礎看護学領域の看護

技術の講義・演習（基礎看護援助論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）は、ほぼ修了の段階であり、他の看護専門領域の概論についても修了している。その他、薬理学などの専門基礎科目、成人・老年疾病論、成人看護学の急性期・慢性期看護学が修了している。臨地実習は、2006年度学生は、看護過程の展開を目的とした基礎看護学実習Ⅱ（2単位）を修了しているが、2007年度と2008年度学生は、修了していない段階である。医療事故や安全対策については、基礎看護援助論Ⅱの「安全」の単元で、感染予防対策と医療・看護事故の種類について講義し、基礎看護援助論Ⅲでは、与薬に伴う事故・感染防止対策を講義している。看護管理の授業は、3年次に位置づけられ、未履修の段階である。

3. 演習の概要と事例の設定

点滴静脈内注射に関する学内演習は、「与薬と看護」の単元において、講義と筋肉内注射・皮下注射の技術チェックを終了した段階で実施している。演習において学生は、教員のデモンストレーション見学後、実際にミキシング作業後に輸液セットを接続し、腕モデルでの刺入・固定、滴下速度調整までの過程を一通り体験する。次に、3～4人のグループ毎に事例（簡単な患者状況と処方箋）の課題にもとづき、グループ員全員の協力のもと点滴物品の準備から点滴作成、腕モデルへの固定、滴下数設定までを制限時間を設けて競い、時間、必要物品の正確性、清潔操作や針固定の確実性、処方内容や滴下数の正確性などを教員が採点するグループ対抗戦に参加する。用いた事例は5事例で概要を表1に示す。事例には、年齢、疾患、点滴の目的・内容以外に、全身倦怠感や片麻痺、車椅子使用などの日常生活行動に支障をきたす状況をすべての事例に設定し、グループ対抗戦終了後に、点滴静脈内注射中の事例患者に予測される危険性についてをグループで考えてもらった。尚、各事例の処方内容は、演習時に実際に準備できる薬品を使用したため、疾患や

治療とは関係のないブドウ糖液やビタミン剤などの薬品名を使用している。

4. 研究方法

演習終了後に、今回の事例患者において、点滴開始後から抜去までに起こるかもしれない危険の内容と危険回避のための予防策についての課題プリントへの記載を各グループに求めた。グループレポートに記述された危険内容を取り出し、項目ごとに単純集計した後、内容毎に整理し、学生の危険予測の傾向を検討した。また、事例や年度による危険予測内容の比較も行った。今回は、危険回避のための予防策については、具体的な方法の記載がないものが多かったため、危険内容の項目のみを分析対象とした。

5. 倫理的配慮

研究の趣旨、目的以外に、研究協力は強制ではないこと、個人が特定されたり、成績上の不利益を被ることはないこと、今回の研究目的以外には使用しないこと、ならびに結果の公表方法を文書と口頭にて説明した。説明は、学内演習時の課題プリント配布時に行った。回収箱は単位認定者の目に直接触れない場所に設置し、グループ員全員の同意の得られた42グループのレポートを分析対象とした。

結果

1. 学生が予測した危険内容

2006年度～2007年度学生の42グループが予測した危険内容の総数は、23項目（延べ個数153）であった（表2）。以下、危険内容の大分類を【 】、小分類を「 」で示し、結果を述べる。23項目は、【静脈内注射に伴う合併症】に関する危険内容8項目（延べ個数71）、【点滴中の観察・管理に起因する危険性】に関する危険内容7項目（延

表1 事例の概要

事例	概要
1	小学1年生。嘔吐下痢症にて入院。経口摂取が不十分なため点滴開始となる。ADL障害なし。安静度：病棟内フリー。
2	20歳、大学生。急性骨髄性白血病にて入院。全身倦怠感、嘔気みられる。血小板3～5万。化学療法のための点滴が開始される。ADL障害なし。安静度：病棟内フリー
3	40歳、男性。心筋梗塞にて入院。心不全症状が出現している。利尿剤を内服中。治療目的で点滴開始。安静度：ポータブルトイレ可。
4	55歳、男性。脳梗塞疑いで検査目的にて入院。左上下肢に軽度のしびれを感じている。本日、脳血管撮影のための点滴開始となる。安静度：車椅子移動
5	85歳、女性。肺炎にて入院しており抗生剤を点滴にて投与中。老人性白内障、右耳に難聴あり。小柄な女性で血管が細く点滴がしにくい。安静度：車椅子移動

表2 学生が予測した危険内容

大分類	危険内容小分類	年度・グループ数			
		2006	2007	2008	合計
		14	15	13	42
静脈内注射に伴う合併症	血管外漏出	10	4	8	22
	薬物過敏反応	7	7	3	17
	空気塞栓・気泡混入	6	3	2	11
	感染	4	0	3	7
	静脈炎	2	0	2	4
	止血困難(延長)	2	1	1	4
	血腫・内出血	0	2	1	3
	神経損傷	0	0	3	3
点滴中の観察・管理に起因する危険性	体位や輸液残量による滴下数の変化	4	6	2	12
	体動による点滴ルートへのねじれや屈曲	3	4	3	10
	ルート抜去(自己抜去, 原因特定なし含む)	2	3	5	10
	速度変化による循環器系への過負荷	3	2	2	6
	ルート接続部のはずれ	0	4	1	5
	クレンメのトラブル(患者が触れる, 動く)による滴下数の変化	2	2	1	5
	逆流	0	1	1	2
点滴中の日常生活行動に伴う危険性	動作時のルート抜去の危険性	3	8	3	14
	点滴中の移動に伴う転倒の危険性	4	0	1	5
	説明の理解不十分	2	1	1	4
	健側の手が自由に使えない	1	1	1	3
	ナースコールが押せない	0	2	0	2
	皮膚のかぶれ(固定テープによる)	1	1	0	2
	点滴スタンドの転倒	0	1	0	1
同一体位や長時間の点滴に伴う苦痛	1	0	0	1	
年度別合計個数		57	53	44	153

べ個数50), 【点滴中の日常生活行動に伴う危険性】に関する危険内容8項目(延べ個数32)の3つの危険内容に大きく分類できた。それぞれの危険内容の中で、回答グループ数の多かった内容は、【静脈内注射に伴う合併症】では、「血管外漏出」が22グループ(52.3%), 「薬物過敏反応」が17グループ(40.5%), 「空気塞栓・気泡混入」が11グループ(26.2%)であった。【点滴中の観察・管理に起因する危険性】では、「体位や輸液残量による滴下数の変化」が12グループ(28.6%), 「体動による点滴

ルートのねじれや屈曲」と「ルート抜去(自己抜去, 原因特定なし含む)」がそれぞれ10グループ(23.8%)であった。また、【点滴中の日常生活行動に伴う危険性】では、「動作時のルート抜去の危険性」が14グループ(33.3%)であったが、「点滴中の移動に伴う転倒の危険性」などの他の7項目は5グループ以下であった。

年度別の【静脈内注射に伴う合併症】、【点滴中の観察・管理に起因する危険性】、【点滴中の日常生活行動に伴う危険性】の3つの危険内容の延べ個数(割合)は、【静

表3 年度別の危険予測内容の割合

危険内容(大分類)	全体	延べ個数(%)		
		2006	2007	2008
静脈内注射に伴う合併症	71(46.4)	31(54.4)	17(32.1)	23(52.3)
点滴中の観察・管理に起因する危険性	50(32.7)	14(24.6)	22(41.5)	15(34.1)
点滴中の日常生活行動に伴う危険性	32(20.9)	12(21.0)	14(26.4)	6(13.6)
合計	153(100)	57(100)	53(100)	44(100)

表4 事例別の危険予測内容

危険内容	事例1				事例2				事例3				事例4				事例5				合計
	2006	2007	2008	小計	2006	2007	2008	小計	2006	2007	2008	小計	2006	2007	2008	小計	2006	2007	2008	小計	
	2	3	3	8	3	3	3	9	3	3	2	8	3	3	3	9	3	3	2	8	
ルート抜去(自己抜去,原因特定なし)	2	3	3	8	3	3	3	9	3	3	2	8	3	3	3	9	3	3	2	8	42
ルート抜去(自己抜去,原因特定なし)	2	3	3	8	3	3	3	9	3	3	2	8	3	3	3	9	3	3	2	8	42
ルートの屈曲・ねじれ	2		1	3	1	1	2	4		1		1		1		1		1		1	10
ルート接続部のはずれ				0		2		2				0			1	1		2		2	5
滴下速度の変化(体動等による)	1			1	1	1		2	1	2		3	1	1	2	4		1		1	11
滴下速度の変化(残量変化)				0		1		1				0				0				0	1
滴下速度の変化(クレンメに触れる)	1	2		3				0	1			1			1	1					5
滴下速度調整不良(心負荷増大)				0			1	1	1	2	1	4	1			1					6
逆流		1	1	2				0				0				0					2
血管外漏出	1	1	3	5	1	1	2	4	3		1	4	2	1		3	3	1	2	6	22
薬物過敏反応(副作用・ショック等)	1		1	2	2	3		5	1	2	1	4	3	1		4		1	1	2	17
気泡混入	1			1				0	1			1	1		1	2					4
空気塞栓				0	1	1		2		1		1	1	1		2	1		1	2	7
刺入部感染	1			1	2		2	4				0				0	1		1	2	7
静脈炎			1	1				0			1	1	1			1	1			1	4
止血困難(延長)				0	2		1	3		1		1				0					4
血腫・内出血				0		2	1	3				0				0					3
神経損傷				0			1	1			1	1				0			1	1	3
ルート抜去(移動動作による)				0				0	1	3	1	5	1	3	2	6	1	2		3	14
転倒(移動動作による)			1	1	2			2	2			2				0					5
健側の手が自由に使えない				0				0				0	1	1	1	3					3
点滴スタンドの転倒				0				0				0		1		1					1
ナースコールが押せない				0				0				0		1		1		1			2
説明の理解不十分				0				0				0				0	2	1	1	4	4
長時間の点滴に伴う苦痛	1			1				0				0				0					1
皮膚のかぶれ(固定テープによる)				0				0				0				0	1	1		2	2

脈内注射に伴う合併症】は、2006年度が31(54.4%),2007年度17(32.1%),2008年度23(52.3%),全体では71(46.4%)であった。【点滴中の観察・管理に起因する危険性】は、2006年度が14(24.6%),2007年度22(41.5%),2008年度15(34.1%),全体では50(32.7%)であった。また、【点滴中の日常生活行動に伴う危険性】では、2006年度が12(21.0%),2007年度14(26.4%),2008年度6(13.6%),全体では32(20.9%)であった(表3)。

2. 事例による危険内容の比較

事例1では、全8グループ中、すべてのグループが「ルート抜去(自己抜去,原因特定なし)」を危険内容としていた。その他には、「血管外漏出」が5グループ、「ルート屈曲・ねじれ」が3グループであった。事例2では、全9グループ中5グループが「薬物過敏反応(副作用・ショック等)」をあげていた。その他には、「ルート屈曲・ねじれ」が4グループ、「止血困難(延長)」と「血腫・内出血」がそれぞれ3グループであった。事例3では、全8グループ中の5グループが、「ルート抜去(移動動作による)」をあげていた。その他には、「滴下速度調整不良(心負荷増大)」、「血管外漏出」、「薬物過敏反応(副作用・ショック等)」の3項目をそれぞれ4グループがあげていた。事例4では、全9グループ中の6グループが「ルート抜去(移動動作による)」をあげて

いた。その他には、「点滴速度の変化(体動等による)」と「薬物過敏反応(副作用・ショック等)」が4グループ、「血管外漏出」と「健側の手が自由に使えない」を3グループがあげていた。「健側の手が自由に使えない」は事例4のみであげられていた危険内容であった。事例5では、全8グループ中の6グループが「血管外漏出」をあげていた。また、「説明の理解不十分」が4グループ、「皮膚のかぶれ(固定テープによる)」が2グループであったが、これらの2項目は、事例5のみに危険内容としてあげられていた(表4)。

考察

学生が予測した危険予測内容を分類すると、【静脈内注射に伴う合併症】、【点滴中の観察・管理に起因する危険性】、【点滴中の日常生活行動に伴う危険性】の3つに大きく分類できた。その中で、危険予測項目数の割合が多かったのは、【静脈内注射に伴う合併症】の項目であり、全体の46.4%であった。これは、講義内容や文献等から一般的に考えられる危険内容であり、学生は、危険性を合併症の視点からとらえる傾向にあることが考えられる。しかし、【静脈内注射に伴う合併症】の中でも、42グループ中の半数以上のグループが回答したのは、「血管外漏出」の1項目のみで、他の「薬物過敏反応」や「空

気塞栓・気泡混入」では半数に満たなかった。今回の紙上事例では、薬剤の設定が明確でなかったことの影響も考えられるが、薬物過敏反応や空気塞栓は、静脈内注射の合併症としての身体への影響が甚大なことを考えれば、講義・学内演習時において、知識の強化が必要な項目と考える。

次に、【点滴中の観察・管理に起因する危険性】の項目については、川村ら¹⁾の報告による医療事故防止上習得しておくべき知識・技術の中にある『末梢静脈からの点滴注入速度は、体位により影響されることを知っている』と関連する項目であり、竹内ら²⁾は、この項目を、事故防止上ごく基本的かつ重要な内容として卒前教育で習得しておくことが望ましい知識として考察している。今回の結果では、「体位や輸液残量による滴下数の変化」を危険性として予測したグループ数は12グループで一番多かったものの、その割合は28.6%と3割にも満たず、「速度変化による循環器系への過負荷」の6グループをあわせても42.8%であった。竹内ら²⁾の2001年度の新卒看護師を対象にした調査においても、知っている割合は、3割程度であったが、7年前の調査結果であり、2002年度の静脈内注射の法的解釈の変更前の結果であることを考えると、卒業時までに学習内容の強化が必要な項目と考える。現在の【点滴中の観察・管理に起因する危険性】に関連する講義内容としては、点滴中の観察項目や管理上のポイントが主たる教授内容であり、学生の危険性としての認識へとつながる内容となっていないことが考えられる。学生の点滴の「滴下速度の変化」を危険性として認識する割合は低く、これは、滴下数の変化が及ぼす身体への危険性の理解が不十分であるためと考えられる。荻ら⁷⁾の報告では、新人看護師が点滴静脈内注射実施時において困難を感じた経験内容の中に、輸液による滴下圧の変化をふまえた滴下調節や状況に応じた滴下速度調節、輸液終了時間の遵守などが上位に位置づけられており、滴下速度調節に関する基本的知識・技術とともに点滴の観察・管理に伴って起こりやすいトラブルの具体的な内容を提示するなど、学生の理解促進へとつながる内容の追加が必要と考える。

【点滴中の日常生活行動に伴う危険性】の項目では、今回、すべての事例は車椅子やポータブルトイレなどの日常生活行動上の制約があり、医療事故のなかの療養上の世話においては事故報告件数割合の多い『転倒・転落』の危険性のある患者状況を設定したが、転倒の危険性を回答したグループ数の割合は1割程度と少なかった。

また、【点滴中の日常生活行動に伴う危険性】は、【静脈内注射に伴う合併症】【点滴中の観察・管理に起因する危険性】の2項目と比べると危険予測項目数の割合が

どの年度においても少なかった。これは、合併症や観察項目のように文献から得られる一般的な危険性としての項目とは異なり、事例の患者を実際に静脈内点滴が実施されている患者としてその生活状況までをイメージして、点滴の観察・管理を含めた日常生活援助を考えることが必要な項目であるためと考える。臨地実習での体験が少ない2年次学生にとっては、紙上患者の情報のみでこれらの危険性を予測することは困難な状況であったことが考えられる。今回対象とした2006年度学生は、対象年度の学生の中で唯一、2週間の看護過程実習を修了した段階の学生であったが、【静脈内注射に伴う合併症】を予測した割合が多く、看護過程実習が修了していない他の年度の学生と同様の傾向であった。これは、基礎看護学実習の段階では、受持患者の点滴に関する管理や観察を含めた日常生活援助は、看護師や指導者の多大な指導・援助のもとに実施している段階であり、知識として「知る」から「わかる」の段階までには学生の理解が進んでいないことが推察される。

学生は、点滴静脈内注射に伴う合併症は危険性として着目できるが、点滴治療を受けながら生活している患者の日常生活行動に着目して危険性を予測することが困難であった。しかし、点滴管理に伴って起こりやすいトラブルや日常生活行動上の制約に伴って起こりえる危険内容を事前に予測したうえで、看護援助を計画・実施することが患者の安全を保障するためには必要である。学生が、患者の安全確保の視点で、点滴管理を含めた日常生活援助への理解を深められるような学内ならびに臨地での教育内容・方法の検討が必要である。

事例別の危険予測内容において、事例ごとの回答グループ数の多かった危険内容を概観してみると、事例1では、小児の特徴、事例2では血小板数の低下、事例3では心不全やポータブルトイレ使用、事例4では左上下肢のしびれや車椅子移動、事例5では高齢者の特徴や血管が細いなどのそれぞれの事例に設定した数少ない情報から、点滴静脈内注射の合併症や点滴の観察・管理、日常生活動作上の危険性を予測している状況が伺えた。1事例あたりのグループ数が8~9グループと少数であることに加えて、今回、学生が危険と予測した理由(根拠)を調査していないため、学生の危険予測の傾向としてとらえるには限界はあるが、学生が学内で学習した知識の中から、事例の特徴と点滴静脈内注射を結びつけて危険性を予測している状況が推察される。今後は、危険予測内容とその危険性を予測した理由(根拠)を分析することで、学生の危険予測の傾向をより明確にできると考える。

最後に、今回、分析対象として用いたのはグループレポート資料であり、個々の学生の危険予測の内容が反映

されていない可能性があることが研究の限界として考えられる。

結論

看護学生の点滴静脈内注射に関する危険予測の傾向を分析し、点滴静脈内注射に関する教育内容ならびに安全教育の基礎資料を得ることを目的に、点滴静脈内注射実施中の紙上事例患者に起こりえる危険性に関するグループレポート内容を分析した。対象は、2006年度から2008年度のA大学2年次学生で、全46グループ中、研究の趣旨にグループ全員の同意の得られた42グループのレポート内容を分析した結果、以下の結果が得られた。

1. 学生が予測した危険内容は、23項目あり、これらの内容は【静脈注射に伴う合併症】【点滴中の観察・管理に起因する危険性】【点滴中の日常生活行動に伴う危険性】の3つの内容に大きく分類できた。

2. 【静脈内注射に伴う合併症】に関する危険内容項目数の割合が一番多く、学生は講義内容や文献等から一般的に考えられる内容を危険性として予測する傾向にあった。

3. 【点滴中の観察・管理に起因する危険性】や【点滴中の日常生活行動に伴う危険性】の危険内容項目数の割合は少なく、学生は、点滴の管理や患者の日常生活行動に着目して危険を予測することが困難であることが考えられた。

最後に、本研究をすすめるにあたり、研究の趣旨に同意ご協力いただいた学生の皆様に心より深謝いたします。

引用文献

- 1) 日本看護協会編：平成14年版看護白書，147，日本看護協会出版会，2002。
- 2) 竹内千恵子，川村治子：就職時における知識・技術の習得状況とその考察，看護教育，42 (11)，955-960，2001。
- 3) 武田妙子，河井友子，山本加枝子：看護場面トレーニングで高める新人看護師のリスク感性，看護展望，32 (2)，119-126，2007。
- 4) 松原みちる，志賀たずよ，原田千鶴，他：看護学臨床実習前の医療安全教育に関する考察 第2報—“危険予知トレーニング”における学生の学び—，第37回日本看護学会論文集 (看護教育)，482-484，2006。

- 5) 原田千鶴，志賀たずよ，宮崎伊久子，他：看護学臨床実習前の医療安全教育に関する考察 第3報—医療安全教育改善プログラムにおける学生の危険予知の傾向—，第38回日本看護学会論文集 (看護教育)，332-333，2007。
- 6) 布施淳子：臨床実習における転倒のヒヤリハット体験の実態と危険予測，看護展望，30 (12)，1394-1399，2005。
- 7) 萩弓枝，伊藤ふみ子，西堀好恵，他：新人看護師における点滴静脈内注射の技術獲得に関する実態，聖隷クリストファー大学看護学部紀要，15，51-59，2007。
- 8) 菊岡祥子，本庄恵子，杉田久子，他：4年制看護大学を卒業した臨床看護師の静脈注射技術の実践—とまどいながらも学ぶこと—，日本赤十字看護大学紀要，19，11-19，2005。
- 9) 平むつ子：卒業演習を経験した卒業3ヶ月後の新人看護師の注射技術の到達状況，秋田大学医学部保健学科紀要，15 (2)，71-76，2007。
- 10) 千葉美恵子，青野菜穂子，阿部貴子，他：新卒看護師の6ヶ月時点における点滴静脈注射の技術評価—技術習得状況調査票を用いた自己評価と他者評価の比較—，第37回日本看護学会論文集 (看護教育)，126-128，2006。
- 11) 川村治子，竹内千恵子：事故防止上習得しておくべき知識・技術100項目，看護教育，42 (11)，952-954，2001。